

ハンナ・アレントの「私有財産」論
——ロック所有論批判を中心にして——
井上 達郎 (立命館大学・博士課程)

本報告は、アレントによる「私有財産」の固有の意義についての積極的評価と、その擁護を中心として展開された彼女の「私有財産(private property)」論である。

近年、アレントの政治思想は、公共空間の再建という理論的課題を掲げる現代市民社会論ならびに公共性論において再評価され、彼女の思想にかんする研究が蓄積されているが、彼女の政治思想については、これまでもっぱら「政治的なるもの」にかんする考察、すなわち「活動」概念を中心とする政治的行為論に焦点があてられ重点的に研究されてきたという経緯がある。これにたいして、アレントにおける「私的なるもの」にかんする議論、とくに「私有財産」論にかんしては、これまで主題的に考察が試みられた研究はほとんど見当たらず、かつ、アレントの「私有財産」論は、彼女の政治的行為論を参照した公共空間の再建という今日的な学問的関心からは逸脱する議論であるかのように見える。しかしながら、アレント「私有財産」論こそは、これまで見落とされていた彼女の公共性論における重要な主張のひとつであり、彼女が擁護する意味における「私有財産」の今日的再建という理論的課題についての考察を深化させることが、現代社会における公共空間の再建にむけたさまざまな学問的取り組みを前進させることに貢献しうると考えられるのである。

このような問題関心のもと、本報告ではまず、アレントの主著である『人間の条件』を参照しつつ、彼女の「私有財産」論について概観する。ここでは公的/私的領域と「私有財産」との関係を整理したうえで、彼女が「私有財産」の有する政治的な意義を積極的に評価していたことを明らかにする。次に「私有財産」の擁護という観点から、アレントによるロック所有論批判の意義を考察する。ここではロックにはじまる近代所有論が、彼女の擁護する「私有財産」を社会的「富」と同一視することで、近代社会においては「私有財産」の有する政治的な意義が見失われてしまったことに彼女の批判の眼目があることを明らかにする。最後に、近代社会の諸条件のもとでの「私有財産」=「所有権」の確保という理論的課題にたいするアレントの議論について考察する。そのうえでアレントが擁護する「私有財産」の今日的再建という理論的課題を前進させるためには、彼女によって「財産」を解体させる要因として批判的に捉えられた「富」という概念を、「資本」制という社会制度批判へと展開させる必要があることを指摘する。さらに「資本」制という社会制度批判への展開は、「財産」が「富」へと解体されることへの批判だけにとどまらず、「資本」制のもとでの「所有」のあり方の変容を批判的に考察することへとつながるということを目指したい。